

たつおか

1950・10

No. 19 号

発行人 北沢小太郎
編集人 情報部
印刷所 株式会社刷

丸々と丈夫な赤ちゃんコンクール

(銀次) 今村知昭(文二)

北沢洋太郎(小太郎)

喜美子(宣三)

下平雅好

(禎)

後藤敬子(金登)

林栄治(實雄)

小林靜子

(郁夫)

関島和子(毅)

福島

畠中壽美子(貞男)

成子(満)

小室茂子(久)

熊谷勝(春男)

(男)

窪田信夫(忠男)

(女)

大庭千鶴子(春男)

拾月訪問記

一時又の商業者は斯く語る

時又よ、何處へ行く！且つて天龍川の港として、郡下の物資集散地であつた本村時又町も、交通関係の発達と、交換経済の発展變化に依つて昔の繁栄はなくなりはしたが、傳統の中にたくましい商魂に生くる商業者は、各々の業態を通じて縣命に町の発展を考へつゝある。

小さな商店街が農家経済の変動と共に苦惱を持ちつゝも、いかにして税金功勢に屈せず立つか、どうしたら竜丘の商工業を発展せしめるか、街頭錄音のつもりで村の豆新聞記者は訪問して各々語る言葉を錄音した。

本村世帯數九七七、内農業六三七を除くと、商工業、俸給生活者、勤労者となる。どこの農村にもある中小企業の苦惱はこゝだけ例外である筈はない。

吾が村も常にこの多数の農家以外の村民の生活と經濟をへた村政がいかに必要であるか考察の一端にしたい。

某薬屋さんの お店にて

昨夜より降り続けた雨も晴れた二十二日(日曜日)。朝いつも瀬度際までこなければ物を運べない記者は、例によつてギリギリ一杯、二十二日締切の原稿を書くため予定された某薬店へお店拜見に伺つた。途中にてあそこの町内は会議で朝山行きに行くと聞いて出掛けけるところでは、「ちと遅い」けられては大変と急いで店に飛び込んだ。案の定御主人は奥様に送られ門先に靴をはうとしているところ。

「村報の記事を戴きに來た」と來意をつげるし、「今山へ出掛けけるところですが」「ちと遅い」と顔を見合せる。ここででやかれてしまつては大変、むづやりにも引き止め様と思つたが、流石は時又商工會總元締をしてゐる此の家の主人「帰つてからしてくれない事なかか」等とつれない事など云はない「さあ」「どうぞ」とや引き返し中に招じ椅子を進めて下さつた。いたつて椅子の小さい記者はかえて恐縮してしまふ。「時又商工業の発展について如何ですか」と一問すれば「これはむづかしいね」と

ニヤリと笑つたが記者が次の程角質問を切り出すのに困る
々と話してくれた。

「先づ第一に時又は交通から見て阿南に通する線、千代田
阜へ通する線を飯田に結ぶ程角岐点で、商業一本として成立
しない。既に需用者の數はきまつており、いくら宣傳し飯
田の商品よりも安く賣つてしまふがその良い例である。時又はどうして
も鼎村の様な立場を取らねばならぬ、でこの商工業の工業
面を取り入れ、商と工とお手にアツビールさせてやつて
行くより外にないとと思うと同時に公民館兼劇場の様なもの
を時又に作り、大いに人を集めることになる事につとめねばならぬ。
それと同時に農業面に機械が発達すれば收穫も大いに増
加する。要は工業を誘致する程角がする。要は工業を誘置し
商と工とタイアップし映画館等を作り大いに外貨の吸収を
計り人の出入を多くの事がある

根本らしい。近く操業開始をとやかく云々される天龍社への期待は大きい。

「税金の負担の問題は如何ですか」「昔は三拾五円納めれば大変納めた人でしたが今は賃上金の二割を税金に見ておかねばならないから大変だ。仮に私の家の収益が二拾万円あつたとしても、其の中一〇万円は税金に取られてしまふから、あととのこり一〇万円で生活するのは非常に苦しい、否苦しいどころか九千円余りでは交際費等も大分かかるからどうしても生活出来ない」

ちよつぴり切實なところこう話してくれる。

「村民税の関係は如何でせう」「現在は固定資産税、事業税所得税から徵收されるが、商人は事業税が多いから非常に痛い」此の地方税法も過渡期で非常に色々の良否のある点

は致しかたないが出来た。定資産税と所得税を中心につてもらえばほど公平ではいか」との事、「村税の割合は商工業者一家と如何でせう」「これははつきりした數字つかめないが、商工業者が一年の場合では四〇%、内時が三二%位出しているのではないかと思う」、「で税金も一家の家計をなうように、お互に一國のかないをやるにもどうして一定の予算はあるのだか」と

ヘタ
に貼
る
き
ら美
して
る。
れる
湯か
來た
移る
税金
署員
から
の
の
額の

おさめなければならぬいしこの重いと云うのも敗戦國の現状としていたしかたない事が、この税金の重いのに商人が恐しがつて萎縮してしまわぬ取られる以上に稼ぐのだと云う氣持にならなければだめです。こゝに良い例があるがY商店とS商店があるがY商店の方はこんなに税金が多くてはやり切れないと云つて商賣をやめサラリーになつてしまつた。S商店の方はこんなに税金が多くてはとてもやり切れないと云つて外交を一人増して收入の増加を計つた。結局は税金に對し積局的でつた方が良かったと云う結果が出てゐる。この様になつて皆必死で取組んでゐるのに、この納めた税金が公金の横領とか変な面に盛んに利用されてゐる点などを見ると私達の納税意欲も非常にぶつてしまふ」

記者もうなずきながら話を聞いている所、税金に対する関心は相当なものを感じられる。今商人はもうかるか、もうからないかと云うより、税金を納めるか納められないかの大きな問題で日夜頭をなやましている事が伺われる。

山行きの途中の御主人をとめたのが非常に気になる。記者もそのつもりで急いで次の質問にうつる。

「村民の購買力の問題は如何でせう」

「大体賣出しの調べから見ると竜丘、川路、龍江、千代、泰阜、上下久堅、三穂、伊賀良、下條等遠くは且聞あたりまで十四ヶ村のお客が入つて來てる事が判る」やはり商工會の役員なるたるものかすべて答へは大局的である。「藥の面から見た購買力の点は一、「此の商賣は病氣になつたらほら藥だと云う様に、急を要する商品だから村の人達のお客を飯田に取られるとか又遠方の人達を当店に取るとか云う様な事は比較的すくないで、すたゞ特に当店では賣れゆきの点は別問題として当店にくればどんな品物でも間に合う様に損をして多くの品物を店に沢山そろえておく様つとめている。お客様は妙なもので同じくすりを二度か三度買いて來て、その店に品物がなければ必ずその店へは買ひにこ意味の觀光事業ではなからうか、之と合せて日常のサークルスが大事だ」終りに店から眺めた竜丘を聞いて見る。

「次にね、商業者の立場から村政に何を望みますか」
「最近村当局が非常に協力して来れる様になり、観光誘置費等として五萬円の予算として計上してくれてゐるし、今までの中配の移轉問題にしても非常に協力してくれた点など嬉しい」「結局税金の問題その他でどうしても一つの大きな施設があると云う事が村財政上に大きく影響してくる点などから皆考へる様になつたのでせうか」「そうです、その点大きくなり、民需を全く満すわけには行かず、政府の衣料放出も掛かりで去年村へ一萬円のお金が入つてゐるのだからね」

需や外貨獲得の輸出に重点があるため、品物により波があり、民需を全く満すわけには行かず、政府の衣料放出も掛かりで、「去年村へ一萬円のお金が入つてゐるのだからね」とは余り有難くない話である。

昨年暮から今春にかけてのタイミングを想起しつゝ店を眺めれば、服地や可愛い子供のジンコ等目につく。

税金に話題を替へれば開口一番「昨年はいくらだつたから今年いくらでは無理がある」はご尤の話、税務署の徴稅は反強制的で修正申告は手續がむづかしく結局駄目で、もう店を擴張したので客入りはどうかと尋ねると結局サービスが大事のこと。

お客様は村内は勿論遠く平代泰阜からも来る由、泰阜の北部から来る人の云うことに「飯田迄行けば一日かかるが、時又だと半日ですむ」と云う。時又で何でも間に合うというようにするため、このあたり時又商人の考へる点ではなからうか、大切な客を素通りさせないために、時又の發展のためには、うわさされてゐる

へさせられた。
税金については何処も同じこと、事業税が四萬円、昨年の所得稅が十四萬円で商業者の負担が重過ぎると煙草をして語り出せば、同席のお嬢さんは「病んだらもうおしまい」という。農家も又その通りで贅意を表した。
お茶をいたじきつゝ大分衛生方面でやがましく、店の改造問題はどうかと云へばやらねばならぬが特別の指示ある迄待機してゐるのが現状とのこと。今後魚屋も清潔になるのはうれしい。
客は大体村内で、若干川路から来る由。大衆魚のサンマなど誰でも買つてくれるから客の階級には余り差違はない八幡以北に比べ競走が少い関係か商人がまだ眠つてゐるサービスが悪く、價格については業種別に留意し合ひたいとはよいことだ。
村政方面には家業で一杯と逃げられた。経済界の動きと共に少なくとも村政も政治である「もつと年をとらなければ」と云はず関心と抱負をほしいものだ。
約一時間店に居るうちに次々と客が来る。農繁期で晝間来られないから夜訪れるのだらう。

村の歴史(五)

(中田 美穂)

三、中世封建社会(続)

⑤、封建制度の完成
封建社会は豊臣秀吉に至つて度は崩れて大名領國の知行制の完成をみた。即ち莊園制に依る武家政治になり、徹底的な兵農分離政策が実施された。

A、刀狩

武士は農村に住んで農民を従うこともあり、その一撥な郎党下人などに使役したのである。また、農民所持の刀脇差、弓、鐵砲、槍等の武器一切を没収して、京都の方へ、檢地と石直しの武家政治の経済の基礎は土地で、土地の種類、反別、生産高、耕作者を調べて、領主の土地人民の支配、年貢の徴収のために檢地が行なわれたが、秀吉の檢地は土地丈量法を一定し、六尺三寸平方を一步に、三十歩を一セ、十七ヶ所持して耕作に專従すべく土地に固定された訳だ。

B、刀狩

武士は農村に住んで農民を従うこともあり、その一撃な郎党下人などに使役したのである。また、農民所持の刀脇差、弓、鐵砲、槍等の武器一切を没収して、京都の方へ、檢地と石直しの武家政治の経済の基礎は土地で、土地の種類、反別、生産高、耕作者を調べて、領主の土地人民の支配、年貢の徴収のために檢地が行なわれたが、秀吉の檢地は土地丈量法を一定し、六尺三寸平方を一步に、三十歩を一セ、十七ヶ所持して耕作に専従すべく土地に固定された訳だ。

原稿募集

（中田 美穂）

界や地名等は莊園領主亦は地頭・御家人の定めたもので地中世期に於てはつきりした「下條記」に田科惣藏の名が見えてゐる。『諏訪造宮帳』に出科郷とあるから、出科、田科等と呼んだ時期があつた。A、駄科村の地名私考は其の出城(即ち出科)が地名となつた。

名となつた。

と考へていゝ。

E、長野原

寛文十二年(二百七十八年)

前駄科村から分村したので

地名も其のまゝ長い原野の地

と考えていゝ。

A、駄科村の組織

A、農村内の階級制度

イ、領主

ロ、代官

ハ、村方三役

名主、庄屋、村長

組頭、名主庄屋の輔佐

百姓代(村民の代表者)

ニ、本百姓(村の正式の構成員、田畠十石(一町歩))

以上を持ち檢地帳に名前を記載される者)

ホ、水呑百姓(檢地帳に載らない小百姓で、名子、被官とも言われ、オヤカタ、コカタ関係で本百姓)

ト、田畠永代賣買禁止

イ、年貢

田畠は米納、一村単位に賦課される。畠には金に從う者)

ハ、農民に對する統制

田畠は米納、一村単位に賦課される。畠には金に從う者)

ハ、分地制限令

田畠は米納、一村単位に賦課される。畠には金に從う者)

ハ、相続の際田畠を十石以下に分割することを禁じた令。

ニ、五人組制度

百姓五戸で作る年貢の下に分割することを禁じた令。

ハ、分地制限令

五年目に竜丘を訪れて（第一）

八月二十二日 今日は皆帰へる予定日なのである。しかし御郷里に帰られる、神山先生を除いて皆残ることになった。神山先生は「森田先生はお腹をこわしていらつしやるから、お晩のおはぎ食べさせないでね」といわれ八時半一分の電車で立たれた。この爲朝食は九時半頃におくれたが、お晩に備へてか皆あまり食べない。朝食がすんでから、昨日行けなかつた金子さん、清水旧婦人会長さん、清水現区長さんへ挨拶に出かけた。どこへ行つても、「およりておよりて、お茶でも飲んでといはれる。挨拶通りがすんでから天龍川へ數名泳ぎに行つた。その連中が帰る頃約束のおはぎがどつしりとお膳にならんでいた。物凄く甘い。十三個も食べた人がいた。その人達はお腹を抱えて、ふーふーいつていた。

ばれている。木梨、河野さん手首を痛めて天龍峠の医者にて行つた小作、森田先生の四人を除いて皆天龍峠に行く、眞青な空に天龍の流れが反射して美しい。五年前と少しも変わらぬ。只人出がなくひつそりとしていた。全員揃つた所で、寫真をとる、思はず吸い込まれそうな水の青さだ、「天龍下りしたいなあ、金さへあつたらね」と盛んにいつているお蕪を食べに休憩所に入りサイダーを飲む。驛前のお土産屋で絵葉書等を買ひ天龍峠を引き上げる。

帰りに川路で降り、湧井のおじさんの家へよつて帰つた。お寺へ戻つて再びテンブラで御飯を食べた。今迄の食事と異つた和やかさであった。

一時半から自由行動で天龍川へ泳ぎに行く人を除いてはもつぱら寫生をした。夕食後待望の「とうろう流し」を見に行く。男の子達はとうろうをとろうと張切つている。橋は人で一杯だ。我々は橋の下へ行くと繩張りがしてあつて云はれた通り特別席がとつてある。「東京都守山小學校座席」と大きく書いてあるのにはてれくさかつた。しかし久保田先生のお家がすぐ上で朝からこの紙を見てうれしくてなげたそうだ。席につくとパツト花火が打ち上げられる。夜空に開く菊の花だ、やがてお坊さんの行列、方丈様も水色のけさをかけていられた。中央の祭壇に火がともされた。やがて大小の提灯がいくつも／＼川上から流れてくれる。とても美しい、綿に石油を含ませて火をつけたのが沢山流れてくる。これは遠くで見るときれいである。かけ声と共に村の若いものがおみこしに火をかざし泳いでくる。開善寺で出したものは古めかしいものだ。我々の席にも途中から早稻田の入交先生の御家族の方々が入られた。

いよ／＼評判の金魚花火だ。ボーンと打ち出すと何匹かの金魚状のものが次々に飛び出

し水面をとびはねながら泳いで消えて行く。とうろうもすつかり流し終り最後に二百連発と云はれる花火をみた。盆踊りはみずく街へ出ると寝い人ごみで、よつばらいも大分出て大した賑やかさであつた。帰つてから今日は最後の晚だと騒ぎ、二時頃皆寝た。二十四日、いよいよ出発の日だ、十時三十四分、皆お寺になどり惜しみながら出発。驛には五時起きをして来て来た。湧井のおばさん、塚平さん、久保田先生、岡村先生、小學校の和泉先生、加藤さん等にお見送りを頂き、お土産迄頂戴した。方丈様は構内までお見送り下さった。上郷の驛には木下校長がわざ々まで送つて下さつたのは感激した。夜九時二十六分新宿着雨の中を解散し、足掛六日間の旅行も終りを告げた。

この度の訪問には村全体があたゝかい心を持つて最大限度に観迎して下さり、我々は非常に感激したのであるが來報告された。

予告　　秋の文化祭・全村綜合展
開催予定十一月二十四日
六日　三日間
小中學校に開催
徒作品展　農藝品評会
生活合理化展　資料展
農業經營改善　生花展
行の歴史展　創作展
もの：
図書館・獨立記念開館
全村野球大会
全村團碁・將棋、マージ
ヤン大会
全村藝能大会
生活不用品交換会開催
有民各位の御協力を乞ふ
南丘村公民館

女子青年團員は

- 九月十二日、女子青年のみの討論会に於て出た結論と主張を要約して、池田文化部長は次の通り女性の希望意見を報告された。

一、農村女性は現在の社会に何をお望むか

第一議題は余りにも大き過ぎるから分類して精神的及肉体的（労力的）との二つに分類して討議に入る。

※精神的

 - 教養お高める機会（講書会、研究会）おもぢたい
 - 現在行つてゐる読書会（駄科農文協テキストによる）は政治的に走り過ぎて一方的であり。余りにもレベルが違すぎるから女子の出席は自然悪くなる。女子にも解る所より始めて欲しい。
 - 過去の因習にとらはれ過ぎる。昔からの單なるおとなしさの殻お破り、女性自らの力で切換へおしなければならない。

- 家庭的な束縛は現在ではおそらくあり得ないでせう。又あるとすれば私達の力で理解されるべく努めなければならない。

女性は男性に対してもお望むか

○女性の意見に對して協力して欲しい。

○女性の発言に対し男性は余りにも非協力的であり、発言者個人に対する白眼視的態度等見受けられる。

○会合の席上男性側より盛に女性の発言を促す声を聞くが、余りにも其の声を重ねる爲、女は発言しようと思つても引込んでしまう。

○女の自尊心よりこんな事を言へば：と言ふ虚栄を捨て赤裸々な氣持になれば発言出来る。

○男性は会合の席上だらしない姿勢をしている。

誠に会の運営に支障をきたす。

- では消えて行く。とうろうもすつかり流し終り最後に二百連発と云はれる花火をみた。盆踊りはみずく街へ出ると凄い人ごみで、よつばらいも大分出て大した賑やかさであつた。帰つてから今日は最後の晩だと騒ぎ、二時頃皆寝た。

二十四日、いよいよ出発の日だ、十時三十四分、皆お寺になぞり惜しみながら出発。驛には五時起きをして下さった湧井のおばさん、塚平さん、久保田先生、岡村先生小學校の和泉先生、加藤さん等にお見送りを頂き、お土産迄頂戴した。方丈様は構内までお見送り下さつた。上郷の驛には木下校長がわざ／＼でて送つて下さつたのは感激した。夜九時二十六分新宿着雨の中を解散し、足掛六日間の旅行も終りを告げた。

この度の訪問には村全体があたゝかい心を持つて最大限度に観迎して下さり、我々は非常に感激したのであるが來

- 今年以上の意義ある訪問ができると思ふ。最後に竜丘村の皆さんから、父兄の方にもよろしく傳へていただきたいの傳言を果して、こゝに筆を闇きたいと思ふ。

讀書は心の糧 圖書館を
活用しましょう